



笑顔を届ける 卒寿の手品師

老人会や小学校、精力的に

15日は敬老の日。由布市挾間町赤野の阿部孝道さん(89)は、手品師としての活動を50年以上続けている。間もなく卒寿を迎える今も依頼があれば各地へ出向く。「これからもたくさんの人を笑顔にしたい」と意気盛んだ。



手品を披露する阿部孝道さん＝9日、由布市挾間町赤野、撮影・山戸孝哉

由布市の阿部孝道さん

阿部さんが手品を始めたのは、トキハの外商をしていた35歳の時。営業相手との距離を縮める手段として身に付けた。「手品を覚える前は玄關先で追い返されることもあった。お客さんの心をつかむには、まず笑顔にすることが必要だと考えた」と振り返る。退職後は県老人クラブ連合会が認定する「ふるさとの人」の一員になり、県内各地の老人会や小学校を

訪問。「チャン先生」と名乗り、チャイナ服に付けひげ姿でマジックショーをする。ただ腕前を披露するだけでなく、時折、観客にも参加して楽しんでもらうのが阿部さんのスタイルだ。手品はテレビ番組や解説動画などを見ながらレパトリーを増やしている。▽硬貨でガラスのコップを貫く▽さいころの目と同じ数字のトランプカードを出す▽消えた紙幣を食パンから出すーなど100種類以上に及ぶ。

「見た人に喜んでもらいたくて、頑張ってる練習して

県内の百歳以上 20人減少1323人

最高齢110歳、岩城喜代美さん

県高齢者福祉課によると、1日時点で県内の最高

きた。たまには失敗する時もあるけど、それは「愛嬌で」と笑う。

7年前に運転免許証を返納し、活動範囲が狭まったものの、みんなに楽しんでほしいという気持ちは変わらぬまま。最近では昭和歌謡も披露している。

阿部さんは17日に90歳の誕生日を迎える。「手品で誰かが笑っている姿を見ると自分もうれしいし、生きがいを感じられる。とにかく人を笑顔にさせたいという思いは今も昔も変わらないので、限界までやり切りたいですね」(松尾祐哉)

齢は日出町の岩城喜代美さん(110)。100歳以上は1323人(男性137人、女性1186人)で、過去最多を更新した昨年より20人減った。

65歳以上の高齢者人口は昨年10月1日時点で37万3743人。総人口に占める割合は34.4%で、前年比0.2%上昇した。市町村別では姫島村の60.1%が最も高く、2番目が竹田市の50.5%。最も低い大分市は29.1%だった。

(松尾祐哉)



〔問①〕 由布市挾間町の阿部孝道さんは、手品師としての活動をどのくらい続けていますか。

〔問②〕 阿部さんは「営業相手との距離を縮める手段」として、どうして手品を身に付けようと考えたのでしょうか。記事の中から、阿部さんの気持ちが分かる部分を抜き出しましょう。

〔問③〕 阿部さんはどのように手品を学びましたか。また、手品のレパートリーは何種類以上ですか。（ ）に入る言葉を記事から抜き出して書きましょう。

（ ）や（ ）などを見ながら

（ ）種類以上

〔問④〕 阿部さんは、「誰かが笑っている姿を見るのがうれしいし、生きがいを感じられる」と答えています。あなたにとっての生きがい（うれしいこと）はなんですか。